

2024年7月29日 日本テレビ 定例記者会見

《要旨》

1. 営業状況

・放送収入

6月単月、タイム・スポット共に106%台、合わせて前年比106%台。第一四半期の放送収入についてはまとめの作業中だが状況としては、スポットは7月～9月前年同期比較で前年を上回る手ごたえがあり、第一四半期の流れから底を打った感がある。

タイムは第一四半期ベースでダウントレンドだった。しかし10月改編セールスではこの流れから踏みとどまった感がある。こういった流れを確かなものにしていきたい。

・放送外収入

今年度日本テレビ出資映画は非常に好調。「名探偵コナン 100万ドルの五稜星」は155億円を超える興行収入。「帰ってきたあぶない刑事」は16億円を超え前作を確実に超える。「それいけアンパンマン ばいきんまんといぼんのルルン」も頑張っており、興行収入5.7億円。大人も楽しめる作品で、大人向け上映会が人気で全て満席となっている。「キングダム 大將軍の帰還」は昨日までに46.7億円、シリーズ最高の興行収入からどこまで延ばせるか注目している。

2. 質疑他

Q. 5月に発表された「セクシー田中さん」調査報告書と7月に発表された「ドラマ制作における指針」について

A. まず、ドラマ「セクシー田中さん」の原作者である芦原妃名子さんに対し心より哀悼の意を表するとともに、ご遺族の皆様にお悔やみ申し上げます。私達は忘れるわけにはいかないと思っている。

日本テレビは、外部の有識者を入れた調査を行い、5月31日に調査報告書を公表した。説明会の場でも申し上げたが、改めて芦原さんがまさに心血を注いで原作「セクシー田中さん」を作り上げ、そして、ドラマ制作に向き合っていたことを実感した。制作担当者は、芦原さんにリスペクトの念をもって接しており、そのため何度も打合せ、やり取りをする結果となった。小学館の調査報告書で、このやりとりが芦原さんに負担をおかけしていたという指摘があった。このようなミスコミュニケーションが生じたことについて、大変心痛む思い。改めて芦原先生に対しては申し訳なく思う。

また脚本家の方は素晴らしいドラマを作ることに力を尽くしていただいた。一方で、ドラマの制作に携わる関係者や視聴者の皆様を不安な気持ちにさせてしまったことについてお詫びを申し上げます。

「セクシー田中さん」調査報告書の提言をうけ、社内横断的なメンバーによる「ドラマ制作プロセス改善推進PJ」を組成し、これまでのドラマ制作プロセスの見直し、検討を行った。各所からヒアリング確認の上、多岐に渡り細部に至る議論を重ねてきたことで時間を要したが、先週、「指針」を公表するに至った。出来るところから実施し、この指針を原則とかかけ、適正なドラマ制作プロセスを構築し実践していきたいと考えている。

Q.「ドラマ制作における指針」について、制作体制をどう整えていくのか

A. 「原則1年前に制作の合意を得る」という部分については、これまでも出来るだけ早く行うようにしていた。ドラマ企画の基本的な合意形成、ということで契約を交わすということではない。ドラマ制作側と原作側が合意形成してドラマ化作業をしていこうとするのが1年前になる。既に今来年の7月期ドラマを進めている。今後も早め早めを心掛ける。報告書の提言をうけて指針を出すまで時間がかかったが、制作陣がこれまでのプロセスを1から丁寧に見直して、実現性を確認しながら決めた。

指針に関しては社内横断的なチームでテーマひとつひとつについて議論を重ねた。さらに外部からも助言・アドバイスをいただきながら客観的な目線で指針をまとめ上げた。

Q. 8月31日～9月1日に放送する「24時間テレビ」の継続について

A. 先週7月22日月曜日に「24時間テレビ」の寄付金を着服した日本海テレビの元社員が業務上横領の容疑で書類送検された。この事案により、募金をいただいた方々からの信頼を傷つける、あってはならない事態として、重く受け止めている。書類送検によって全てが終わるわけではないと考えている。

番組を制作・放送している当社としては、寄付をしてくださった皆様、番組やチャリティー事業に携わってくださった皆様、スポンサー各社の皆様、並びに視聴者の皆様に対し、今一度、心よりお詫び申し上げますと共に、今年も新たな形で「24 時間テレビ」を継続していくために制作を進めている。

メディアが発信する社会貢献、チャリティーは継続することに大きな意味があると考えている。46年間、皆様から募金をお預かりし、福祉車両や障がい者スポーツ支援などの福祉活動、環境保護活動、災害復興支援活動などを行ってきた。今年も「24 時間テレビ」の寄付金による支援をお待ちいただいている方や団体が多くいらっしゃる。その方々の思いに答える意味でも再発防止策を徹底した上で今年も放送することを決めた。

企画の硬直化のご指摘は受け止めており、以前より感じるころではあった。昨年の放送後に2024 年度の番組担当者に対して、「長い年月でブラッシュアップさせながら継続してきた従来の基本フォーマット・構成・演出に関して、大きく変えることも検討しつつ準備して欲しい」と伝えた。その上で今年制作チームは「愛は地球を救うのか？」という24 時間テレビチャリティーの原点に戻るテーマを決めて、メインパーソナリティの役割を背負う人を置くスタイルではなく、総合司会者とチャリティーに賛同していただく複数の方々で番組をつないでいくという新しい形を決心した。

Q. 「24時間テレビ」の放送内で寄付金着服問題について取りあげるのか

A. いただいた募金の取り扱いについては、再発防止策を基に、募金する方々に安心していただくためにも「このような形でお預かりし管理をしています」という情報は入る予定。系列局や協力団体の方々が再発防止策をどのように実行していくかをご説明する番組は既に放送している。また再発防止策の1つとして非接触・キャッシュレスをアピールし、時代にそった募金の在り方を進めて実施していくことをお伝えする。

Q. 「24時間テレビ」、チャリティーランナーやす子さんの抜擢理由、期待するところ

A. 彼女がこれまで語っていなかった、児童養護施設での生い立ちによる思い「施設にいる子供たちに気持ちを届けたい」に特化した形でチャリティーマラソンを走りたいという強い意志があった。彼女ならではの明るさでチャリティーを呼び掛けていただけると期待している。

Q. 「24時間テレビ」、チャリティーマラソンにおける猛暑対策について

A. 酷暑の中でのスポーツになるので細心のケアが必要になると考えている。

入念に準備している。当然ながら専門チームによる指導・監修のもとメディカルチェックを行っている。さらに暑さに強い身体を作るための「暑熱順化(しょねつじゅんか)トレーニング」を行い万全の準備を整えている。全てランナーのコンディションに合わせた形で行っている。

Q. 「24時間テレビ」の総合司会・上田晋也さんに期待していること

A. 例年と異なりスタイルを変えた「24時間テレビ」では総合司会の役割がより重いものになってくる。リスタートの中、チャリティーに賛同していただいた出演者の方々をまとめる力に期待している。羽鳥アナウンサー・水トアナウンサーともいい組み合わせになると期待している。

Q. 米大リーグ大谷翔平選手の自宅購入に関する報道について

A. 日本を代表する世界的アスリート、大谷選手については大きな尊敬の念をもって取材放送させていただいている。報道の中で大谷選手とご家族にご心配、ご迷惑をおかけしたということについて、申し訳ないと思っている。大谷選手サイドには既にお詫びの気持ちを伝えているが、この場を借りて改めてお詫びの気持ちを表明させていただきたい。大谷選手とご家族のプライバシーが守られ、平穩に生活ができるよう今後より一層配慮していきたい。

視聴者の皆さまにも、現地などに行かれた際には大谷選手のご家族のプライバシーへの配慮を呼びかけさせていただきたい。大谷選手の日々の活躍はメディアとしてしっかり伝えていき、今後も応援していきたい。

Q. 大谷翔平選手の件、取材パスは凍結されているのか

A. 取材の経過や内容についてはお答えを控えさせていただく。現時点で日本テレビの取材やOAへの支障は出ていない。

Q. パリ五輪について

A. パリならではの素敵な開会式だった。ここまで日本はメダル7個と日本代表の活躍が伝わっている。国内の盛り上がりもスタートダッシュの段階だと思っている。

オリンピックには予想外の展開もあり、それがスポーツの魅力であり醍醐味。選手の皆様にはこれまで練習で積み上げてきた実力、その魅力をさらに発揮してほしい。日本テレビとしても競技中継・ニュース・情報番組を通じて、各選手が練習の成果を十分に発揮する様子を伝え、より一層盛り上げていきたい。

どれも注目競技だと思っている。視聴者の皆様の関心が高く比較的視聴しやすい時間に放送する競技も多いのでぜひご期待いただきたい。

Q. 3月に終了した中京テレビ制作の番組「それって！？実際どうなの課」とTBS「巷のウワサ大検証！それって実際どうなの会」について

A. 「それって！？実際どうなの課」は日本テレビ系列局の中京テレビが制作していた番組なので、日本テレビとしてはお答えすることを控えさせていただきたい。

Q. 「らんま1/2」の制作決定について

A. 今回の企画は原作者の高橋留美子さん、出版社・製作会社の間で「もう一度新しく作ってみよう」と企画された。この企画を聞きぜひ日本テレビも参加させてもらいたいと放送を決定した。第1話は往年のファンにとっては大変懐かしくて楽しいし、若いファンを増やせるのではと期待が持てる作品になっている。

(了)

石澤 顕	代表取締役社長執行役員
福田 博之	取締役副社長執行役員
澤 桂一	取締役常務執行役員
松本 達夫	取締役執行役員